



天久朝誠 議員

○議長（花崎為継）

再開いたします。

午前に引き続き一般質問を続けます。

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

ただいまから一般質問を始めます。

沖縄県が置かれている状況は、いま深刻な状況に向かえております。先の大戦後から基地に囲まれ、今だ県内で基地をたらい回しにしようとしている現状がございます。その根底には、経済的に自立できていないというイメージが大部分の県民や、政治家にあるからではないかと私は感じております。

沖縄が経済や、基地問題を含め、今後あらゆる課題から脱却するには、これからの沖縄の子ども達がどのような教育を受ける

かに掛かっていると思います。

いま私たち大人が子ども達の教育に全力で取り組まなければ沖縄の真の自立はありません。県民が経済面でも自立し、国際人としても自身をもつ必要があります。

そのためには、英語という道具が必要不可欠です。この道具を駆使し、万国の国、沖縄を発展させるために、本土と同じことをしてはいけません。いま頑張るのは、子ども達の前に我々大人であります。金太郎飴のような、どこを切っても同じような教育方法ではなく、沖縄独自の特色ある教育を進めるために、あらゆる努力をする必要があるはずです。

幸いのごとに、北中城村は10年以上前から国際的人材を育てようと海外短期留学ESLキャンプ等の事業に取り組んできました。

また最近ではNPO法人琉米歴史研究会との連携により、米国大学とのインターネットを介したりアルタイム授業ドットプログラムを日本で最初にスタートさせて、約1年が経ちます。

折に触れ、私も何度か授業を見学させてもらいましたが、このプログラムを受講した児童・生徒の英語力の上達には目を見張るものがあります。

しかし、このDOTEプログラムを導入するにあたり、当初様々な不安があったことだと思います。

日本の自治体において、どこも取り組んだことがない事、場所の問題、米国との時

差の問題、そして機材の問題、コーディネーターの問題など、これらを一つひとつ解消させていった新垣村長はじめ、教育委員会の努力は村民も非常に高い評価をしており、取り組みの重要価値を強く共感しております。

そこで伺います。今後の展開として、現在のクラス編成を増やす予定なのか、伺います。

次に現在、あやかりの杜に設置しているポリカムシステムを使ったDOTEプログラムを北中城中学校で行えるようにし、中学校全体の英語授業に組み込めるようにする、これも全国初の取り組みです。全体の英語力を高めることができ、子ども達の将来の可能性を大きく広げることが出来ると考えますが、当局はどのような考えを持っているか伺います。

そして、中学校へポリカムシステムを設置した場合の概算経費を伺います。

そして導入にあたり、課題となりそうなものがあれば伺います。

次に2番目、海外短期留学生同窓会設立について。

我が村が海外短期留学事業に取り組んで10年以上が経ち、留学を経験した経験した子ども達は100人を優に超えていると思われれます。村民が支え、海外へ送り出した子ども達は、社会人となって現在多方面で活躍している人も出てきております。

本村の海外短期留学経験者同士がつながりを持ち、様々な分野で連携する。また、

次の世代の子ども達を導いていく仕組みづくりが必要ではないかと考えます。

本村にとっては経済、教育、文化、あらゆる面で連携できる非常に有用な組織となると考えますが、当局はどのように考えているか伺います。

次に、北中城村漁業組合のアーサ収穫量減少の原因と対策について。

我が村の特産品として、広く知られるようになったアーサ、近年ではアーサを減量とした特産品開発も進み、本土の百貨店での地方策産品まつりにも沖縄代表として出品するなど、精力的な動きが見られます。

そのアーサ収穫量が例年にない数字で落ち込んできております。そこで私は、北中城村役場の職員、沖縄県、総合事務局と共に、アーサ養殖場の現地調査に同行させていただきました。

6つの調査ポイントを約2時間かけ、歩いてみて、感じたことが幾つかあります。

その中で、まず伺うのは、過去にあまり見られなかった網に付着する黒い物質（名称は不明）の除去に、漁民の皆さまは作業量の増大を余儀なくされている現状があります。

当局では、この現状をどのように捉えており、現時点で考えられる原因と、実施している対策、そして網に付着する物質の詳細が分かれば伺います。

○議長（花崎為継）

村長 新垣邦男。

○村長（新垣邦男）

それでは天久朝誠議員の御質問にお答え致します。

まず1点目でございます。全国初となるDOTEプログラムを中学校全体へ導入、あるいは2点目が海外短期留学の同窓会の設立ということ等々については、詳細については後ほど教育委員会のほうに答弁をさせたいと思いますが、こういう独自の取り組みが大変評価を受けているということについては心強いものがございます。

私も今年の4月末からアメリカの方に行って参りました。ゴンザラ大学、ワシントン州立大学、そしてセントジョーンズということで、これまでセントジョーンズのみだったんですが、これからゴンザラ大学、ワシントン州立ということで、幅を広げていきたいということで南城市長と一緒にやって調査をしてきたんですが、逆に向こうからいまワシントン州立大学から言わせると、非常に北中城村の子ども達はレベルが高いという評価を得ています。

ですから、こういう着実に授業をすることによって、この子たちは将来非常に英語力が付くだろうということをおっしゃっていましたので、心強くしている所であります。

併せて、この子たちは将来、アメリカに直接留学する際も受け入れをしっかりとやっていきたいというようなことでしたから、そういう授業をしっかりと今後も取り組んでいきたいなあというふうに思っているところであります。

ただ中学校への全体の導入だとか、同窓会の設立、詳細については、いま教育委員会がしっかり取り組んでいますので、答弁をさせたいと思います。

3点目の漁業組合のアーサ収穫量の減少の原因と対策ということですが、確かに今年収穫は落ちているということで、3、4年周期にそれがあるのかなあということ言われているんですが、ただそれだけじゃなく、いま色んな要因が考えられるのではないかとということで、生産者の皆さん大変心配をなさっています。

ただまだ特定には至っておりませんが、これからも調査を続けていきたいというふうに思っております。

現在の取り組み等々について、後ほど産業振興課長のほうに答弁させたいと思っております。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

天久朝誠議員の御質問にお答えを致します。

1点目の全国初となる取り組み、DOTEプログラムについての御質問にお答えをします。

まずクラス編成を増やすことにつきましては、現在の実施場所が御存じのあやかりの杜ということからしますと、収容人数をはじめ、スタッフの対応や帝経大学の教員の日程調整等、課題がございます。

現状としまして、1クラス12名定員の

2クラスに編成して、併せて24名での定員として募集をし、実施をしているところでありますが、現在、19名の受講に留まっております。

従いまして、これまでの応募状況の推移や、諸般の課題等から踏まえますと、これ以上のクラス編成を増やすことは厳しいという認識でございます。

また中学校全体の英語の授業に組み込むということにつきましては、学習指導要領や、学校カリキュラム等との兼ね合い等、制約的要因があまりにも多すぎる現状がある上、帝経大学の教員の対応の問題もあることからしまして、通常の英語の授業にこのプログラムを導入することは厳しいという認識であります。

なおシステム等の概算経費につきましては、あくまでもあやかりの杜における取り組み事例からしますと、初年度は新規導入に伴う備品等、購入も含めると、概算で見積もって、およそ700万円が見込まれているところでございます。

次に、2点目の海外短期留学生同窓会設立についてお答えをいたします。

本村は平成14年度の第1回海外短期留学生派遣以来、今年度で11回を数え、実施をいたしております。その間、これまで派遣された中高校生の延べ人数は136人に及んでおります。今後は、相互の情報交換など、ネットワークづくりを通して時代を担う多様な人材育成につながっていくものと考えております。

このようなことから、本件にかかる耐用につきましては、今後におきまして、情報収集等をしていく中で検討させていただきたいと考えております。

○議長（花崎為継）

産振課長兼農委会事務局長 楚南兼二。

○産振課長兼農委会事務局長（楚南兼二）

天久朝誠議員の御質問にお答え致します。アーサの収穫量減少の原因と対策についてですが、網に付着する物質は、する断層であると聞いています。これは沖縄県水産海洋技術センターよりの情報提供で、海岸では普通に見られる藻類ですが、潮の流れがあまりなく、栄養塩の濃度の高い場所で多く発生するようで、本村のアーサ養殖場一帯でも多く発生しているのを確認しています。原因ははっきりしていませんが、断層の生育に適した環境になっていると考えられ、現在の所、除去に関しては種付け後、網の洗浄、回数 of ゼット噴射で除去しており、作業量が増えているのが現状でございます。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

では、DOTEプログラムの件から再質問したいと思っております。先ほど村長から子ども達の評価はあったんですが、教育長はDOTEプログラムを受けている子ども達の評価、1年間やってきて、教育委員会としてどのように評価しているかをまず伺いたいと思っております。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

お答えします。この本教育委員会で実施をしておりますストーリーコンテンツ等がございます。その中での児童・生徒の英語の状況等々を見ますと、だいぶレベルアップしたなあという、そういった感をもっております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

レベルは上がってきているかなあと私も同感でございます。このDOTEプログラムは1年間見ているんですけど、非常にタイトなスケジュールなのかなあと感じております。例えば、子ども達は月曜日から金曜日までの通常の授業をして、部活動もされて、土曜日、日曜日をDOTEプログラムの授業をいまされていますね。

この日程というのは、子ども達にとってどうなのかなあと、1年間やってみて、きついことも、部活動も更にされている子もいるはずですから、これはどうにか改善してあげたらいいなあと思うんですけど、なかなかうまくはいかないと思うんですけど、例えば、この私が今回提案しているDOTEプログラムの中学校への導入という理由は大きく分けて2つあって、1つは学校にこの機材があれば、例えば平日の早朝であったり、放課後であったりで対応できない

かなというふうに1つ考えたことがあって、その辺りの日程について現在の土、日の授業、DOTEプログラムの授業についてどのように評価しているか伺います。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

お答えします。議員御指摘のように、この部活との兼ね合い等々もございますけども、やはり先ほど御報告しましたように、19名のいま受講生に留まっていると、これは更に広げる意味では、早朝、放課後等の御提案がございますけども、そういった検討も必要かなあと感じております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

もう1点、今はこのスケジュールの時差の問題もありますから、もう少し柔軟にできたらいいなあという希望があります。

もう1つは、中学校のALTの先生がいらっしゃいますね、このALTの方々の能力、その辺が私たちは委員会としてまだあまり調査もしてない部分があるんですけど、まずはALTは本村に何名いらっしゃいますか。2名ですか、3名。

この3名の方々は、あちらで言う英語を母国語としていない方々、私たちの子ども達は。その子ども達に教える資格と申しますか、そういうものは持っていらっしゃるのでしょうか。ALTの皆さんは。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

特に試験による等々の資格条件はございません。採用の際は面接等で採用させていただいております。

先ほど3名というお答えをしましたが、2名の方が母国語をアメリカでございまして、1名の方がJTで日本人でございまして。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

実は、村長もアメリカに行かれてESLという、「
」という、第二母国語というか、日本語の次に学ぶという、こういう専門的な物証があつて、留学生の方々は、そこでまずそういう英語を学んでから、大学の授業等に入っていくんですけど、こういう資格というものが、徹するというのがありまして、米国では。この母国語を英語としない方々に教える教授法というのがあるんですけど、これを専門にやっているのが、いまそういった先ほど村長が言っていたワシントン州立でやったり、コンザリでやったり、そういうところがいま専門でやっている先生方がいらっしゃるんですね。

DOT Eプログラムの生徒達は、その方たちの授業を受けているんですね。私はこの英語というものは、非常に楽しいものであると思うんですけど、自分の体験からしても、どっかですまづくと、また導入にあ

たって、あまりよくない感情を持つと、もうそこでストップしてしまうような、他の科目もそうだと思うんですけど、そういうものがありまして、できれば早い段階で、そういった専門の方々に英語を楽しく、学ばせてもらうような環境づくりを我が村の子ども達にはやってあげたいなあと思うんですけど、そこで、いまそういったワシントン州立大学との関係で、DOT Eプログラムという今システムがありますから、19名の子ども達は、いまこれを教授できているんですけど、他大多数の子どもが、言ってみればいま出来てない状況、私できれば、そういう拡大して、そのレベル、レベルに合わせて、子ども達をどうにか先生方のどうにか触れ慣れないかなという思いがありまして、今回質問しているんですけど、この専門性に関して、私はこれからとても必要だと思うんですけど、教育長はどのように専門性、導入にあたって子ども達の考えているか、お聞かせ下さい。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

いま議員御指摘、御提案のこの人材についての確保が大きな課題となっているのが現状でございます。

のように、そういった英語キャンプ等々でも感じておりますけども、そういった指導者の人材の確保というのが大事な点かなあという認識を持っております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

いまの指導者の人材の確保、それは非常に難しい事ですね。どこの学校へ行っても、ただいま現在、北中城村が優れている所はDOTEプログラムを導入しているということで、ワシントン州立大学とのコネクションもあります。そして先ほど言った

とか、セントジャーンとか、いろんな今大学と、琉米歴史研究会を介してですけど、そういう意味、パイプがあるんですね、これを使わない手はないのかなあと、私自身思っています、琉米の方に調査をさせてもらって、中学校でこういう拡大した、いまのDOTEプログラムを拡大した学年に応じた授業というのはできないかなあというふうに投げかけてみたら、準備は、想定はしていると、そう言う答えがあったので、これは可能じゃないかなあと私は思っています、そこで先ほど、最初の答弁であったんですけど、米国大学との教員の連携の調整が難しいと、その辺はクリアーできるのかなあと思っているんですけど、どちらかと言うと、現地の私たちの教育者というか、学校の方が課題かなあと思っているんですけど、学校側はどのように、例えばこういうことを提案したときに考えるのかなあと、教育長は現場に近いからお聞きしたいんですけど、よろしくお願いします。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

議員御指摘の点なんですが、やはり大きな課題は現在、議員御存じのように、学習指導要領で学校教育は展開されてございます。この1時間、1時間の授業が指導書によって細かく指導内容が記されております。学校の職員としましては、このDOTEプログラムの内容を授業に導入するにあたっては、そこら辺の単元での取り扱い、細かい年間計画等々で、私どもいま派遣されている主事がお1人で、この学校現場も多忙の中で、そういった研究等々をこなして導入するというのが一番大きな課題かなあとそう思っております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

確かに北中城村は主事はお1人です。県からの。これを2人にするかというのは、いま課題と思うんですけど、最初の学習指導要領に話は戻るんですけど、こちらを例えば1から4まで単元があれば、それをクリアーすればいいということでしょうか。

例えばプラスアルファで副読本のように、例えばそういう授業というものはあると思うんですけど、それは単元の中にございますか。例えば。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

そこでいま中学校においては、週4時間の授業を行っておりますけども、その中で年間を通じた毎時間、毎時間の計画がなさ

れております。ですから、そこら辺の組み込み方等々が大きい課題かなあと、そう思っているわけです。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

研究次第ではできる可能性もあるという、もう全くもって門前払いできませんよということなのか、例えばこういう週何時間、年間何時間、そのうちの例えば2週に1時間でもいいんです、そういう組み込み方というのはできるのか、できないのかという、具体的によろしく願います。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

いまお尋ねの件なんです、御提案のこの授業へ組み込むというボリュームからしまして、やはり国のそういった制度と申しますか、学習指導要領の中身に踏み込んでいくわけですから、私どもというよりは、例えば教育センターの、そういった範疇での課題の検討、そういったものになるかと思っております。

○議長（花崎為継）

しばらく休憩いたします。

午後1時53分 休憩

午後1時54分 再開

○議長（花崎為継）

再開いたします。

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

厳しいというのは、私も質問する前から厳しいかなという側面ももっております。

ただ決まっていることを削るのではなくて、例えばこれも履修して、更にプラスアルファという考え方では、こういうことは可能かなという質問なんですけど、答弁よろしく願います。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

カリキュラムの話、4時間ということお話ししたけども、その時間の中での取り組み方になろうかと思うんですが、そのいまの範疇では厳しいという感じをしております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

この進め方によっては可能という、4時間の部分を、その範囲内で納めて、残った部分というか、余力があればそういうこともできるという理解でよろしいですか。

それとも、もうガチガチなのかという、単純なあれで余力があるか、もう枠は決まっていますよという、一切入りませんよということなのか。答弁よろしく願います。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

お答えします。この全然入らないという検討の前に、そういった学習指導要領の内

容についての置き換え、そのDOTEで取り扱っている内容をどの部分で置き換えるか、それからしますと、毎時間の3学年分の、そういった大きな検討課題になるわけです。

ですから、この場でできそうですよとか、そういった範疇ではないような感じがします。

○議長（花崎為継）

しばらく休憩いたします。

午後1時55分 休憩

午後1時56分 再開

○議長（花崎為継）

再開いたします。

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

では細かい話しはなかなか色々資料等もないですから、お互い、今日はなかなかできないかもしれないですけど、ひとつ大きな考えで、村長に伺いたいんですけど、村長は米国に2度行かれて、いろいろあちらの事も知っていらっしゃる、この今、沖縄の子ども達の現状を見て、いまの日本の文科省が推進する英語教育で、例えばいまの沖縄の子ども達が将来どのようなようになるかという、想像されたことはございますか。

○議長（花崎為継）

村長 新垣邦男。

○村長（新垣邦男）

想像というか、思いとしては、うちの村だけじゃなくて、いまある日本の教育制度の中で、国はいま見直して小学校から英語

ということですが、もし真剣にその英語教育、会話という形で持っていくのであれば、根本的に、これは見直しをしないと、この歴史ずっと始まって英語を取り入れているんですが、我々も話せない、会話ができないという状況なので、要するに話せる機会をどう作っていくかだろうというふうに思っているんですが、米国行って感じたのは、何も文法とか、そういう難しい話じゃなくて、まず会話ができる体制づくりが急務じゃないかなあという思いはしております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

村長に伺います。南城市も同様ないま取り組みをしようかなと、準備されていることは御存じだろうと思うんですけど、例えば、北中城村はDOTEプログラムを最初に導入しました。次に、じゃあ打つ手はなにかないかなあということを考えた時に、私はこの方を提案したいんですけど、全体的に、専門的じゃなくてもいい、この学年に当たったもので、英語の楽しさを本場の表示方法を子ども達に、北中城村の子ども達に出来ないかなあという、単純な思いなんですけど、村長、南城市のいまの取り組みの現状は御存じですか。

例えばDOTEの準備はどういう形でやっているとか、もし知っていれば。

○議長（花崎為継）

村長 新垣邦男。

○村長（新垣邦男）

南城市の具体的ないまの段階でDOTEをどう取り組みかということは確認はしておりませんが、ただ、あるいは教育委員会として、南城市もうちのようなDOTEを取り組みたいということで準備をしているということを伺っておりますし、そして南城市としては、その英語を特化した高校を作りたいというような思いも市長としては持っていらっしゃるという話しは聞いております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

分かりました。もう1つ確認させていただきたいんですけど、最初で初期投資が例えばやるなら700万円掛かりますよとございました。

この初期投資700万円で、ランニングコストがいくらというふうなのはちょっと分からないんですけど、全体に、中学校に導入した時に、どういう形にするかは分からないんですけど、例えば初期投資700万円で、年間授業数が3学年5クラスで、週1回としても約500数時間でしょうと、その中でだいたい約500～600万円という、ランニングコストが必要だというときに、例えば一括交付金の活用というのは、これは有り得ることなのか、いまの状況で、予算の配分の方法で、ランニングコスト600万円ぐらい、これは一括交付金に値するののかという、村長の感想でよろしいので、伺いたいと思います。

○議長（花崎為継）

村長 新垣邦男。

○村長（新垣邦男）

これを政策的にやるということであれば、当然、いろんな対応方法があるかと思えますし、一括交付金もその該当項目、念頭に入れながら進めていくべきかなあとと思うんですが、ただ先程来、教育長からも答弁があるんですが、このDOTEプログラムを中学校全体的にやりたいという思いは、十分理解をしておりますし、将来的にそれが出来たら非常に望ましいなあとという思いをもっています。

ただいまあやかりの杜でDOTEプログラムを選抜してやってはいるんですが、それを学校全体でとなると、いま学校現場含めて、教育委員会が心配するのは当然のことだろうと思っております。

いまあるカリキュラムにどうやってそれを入れるのか、あるいはそれ以外に工夫があるのかどうなのか、そして学校現場の先生方がそれを対応し、全体的に見ているのかどうなのかと、大変不安もあろうかと思えます。

要するに今までやったことがないことをやるわけですから、そういう不安を取り除きながら、しっかりその時間をかけていきながら、それができる方向性を検討していくということであれば、いついつやりますよということではなくて、十分検討に値するだろうと思っておりますが、事前にその条件整備をしっかりやっていかないと、ただ

単に混乱を招くだけで終わっちゃあという心配もございますので、そういうことがないように、私としては、とてもいい企画だろうと思っておりますので、いまある制度の中で、どう生かしていけるのか、その国から与えられたカリキュラムの中で、村独自の英語教育という特化したものの中で、それが生かされるのかどうなのか、大所高所からそれは検討していきながらやっていくべきだろうというふうに思っています。

当然の如く、教育委員会、学校現場とも連携をしていくことが慣用だろうと思っております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

分かりました。いろいろそう急いでもうまくいかないのはもちろん重々承知なんです、ただ提案として、これから必要だよと思えば、たぶん村長も一緒かなあと思っております。

ぜひ教育長、機会があれば、来年でも、アメリカに一度行かれて、あちらをワシントン州立大学であったり、そういう学長さん達と会って、今後の事についても是非北中城の代表として一度米国に行ってほしいなあと思いがあるんですけど、いかがでしょうか。機会があればで。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

いま御提案のとおり、機会があればそういった視察も行ってみたいなあと思っております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

では次に移りたいと思います。

海外短期留学の同窓会について、再質問させていただきます。我が村は、短期留学を他の市町村と一緒に始めて、たぶん一番長い歴史があるのかなあと、10年以上あるのかなあと思っていますが、先ほど130数名の経験者がいるということなんですけど、これまではこの同窓会というか、そういう形じゃなくてもいいんですけど、この経験した方々を集めて何かイベントをしたり、そういう会をやってみようという検討されたことはあるか、また何か実施されたことがあるか伺いたいと思います。

○議長（花崎為継）

生涯学習課長 大城 博。

○生涯学習課長（大城 博）

お答え致します。この海外短期留学同窓会の設立につきましてなんですが、過去にそういう設立の動きがあったかどうかにつきまして、ただ1回だけそういう準備がなされたというのがございまして、平成20年3月に立ち上げの設立の準備まではなされて、その後、いろいろございまして、途絶えている状況にあります。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

確認なんですけど、これは平成20年のものは、各市町村同時期に何か新聞記事とか、何か載ったような、各新聞記事で5名ぐらいの子ども達が写真載っていたのが思い当たるんですけど、その設置のことなのか、あれは確か設立とか、同窓会を何か作ったような形で書かれていたんですけど、あれは準備会でよろしいんでしょうか。

○議長（花崎為継）

生涯学習課長 大城 博。

○生涯学習課長（大城 博）

お答え致します。ずいぶん前の事なので、詳しい事は定かではございませんけれども、ただ私がいま確認したところ、本村に限りてそういう準備が進められたということでございます。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

準備までいって、なかなか形にならんかったという、何かしら壁があるんですけど、南城市さんが昨年同窓会を設立したという情報を聞いているんですけど、この辺りの情報はお持ちでしょうか、どういう趣旨で設立しているんだよというものも含めて。

○議長（花崎為継）

生涯学習課長 大城 博。

○生涯学習課長（大城 博）

お答えいたします。南城市の件につきま

しては、昨年ネットワークづくり、それから将来の人材育成も含めて、まちづくりに生かしていこうという、そういう話はあったということで、承知をいたしております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

私も南城市の考えを記事で読んで、非常にいいなあと思って、我が村にも作れないかなあというふうに正直思いました。なぜかという、やはり21万5千円、もちろん村から助成はあるんですけど、自己負担をしてもやっぱり行きたいという子ども達が、親子さんもいて、非常に向上心がある子ども達、その将来の子ども達が大人になったときの事を考えると、ぜひ村に生かさないと手はないかなあというのが1つと。

あとは子ども達同志がつながり、そういう経済面でも、文化面でも、例えばそういう次の世代の教育面でも、何かつながる形がこの会をもって、形にできれば、非常に北中城にとって有益な事なんじゃないかと単純に思うんです。

ただ設立する事務局等の問題がもしかしたらあるかもしれないんですけど、今後こういう積極的に研究していくとか、考えはおわりかどうか伺います。

○議長（花崎為継）

教育長 森田孟則。

○教育長（森田孟則）

お答えします。議員のただいまの御提案、やはり136名を超える子ども達が向こうで

研修を受けてきているわけです。

いま議員御提案の趣旨からしまして、やはりネットワークを構築して、そういったただ今の南城市さんの趣旨等々を踏まえますと、やはり検討する必要あるなあと、そういったふうに思っております。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

一昨年も安里さんがアメリカに行かれまして、その行く前の認定式かなんかあったと思うんですが、その場でも彼は「この卒業して、将来大人になったらこの故郷のために尽力します」という、認定みたいな、自分でそういうサインもしたような、そういう気持ちがある若い人がいて、非常にうれしいなあと思ったんですけど、そういう人達をどんどん増やしていく、この会というのは、また必要だと思っておりますので、ぜひ今後検討していただいて、形にしていただければいいなあと思っています。

では次の質問に移りたいと思います。アーサの収穫量減少の件なんですけど、まず現在の収穫量と、最盛期の収穫量、トン数でどれぐらいあったのか、伺いたいと思います。

○議長（花崎為継）

産振課長兼農委会事務局長 楚南兼二。

○産振課長兼農委会事務局長（楚南兼二）

お答え致します。現在の収穫量は、これは平成24年の農水省の統計で31トン、そして最盛期が平成14年に70トンでござ

います。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

だいぶ収穫量がへっているんですけど、この原因として考えられるなあとというのがあれば伺いたいと思います。

○議長（花崎為継）

産振課長兼農委会事務局長 楚南兼二。

○産振課長兼農委会事務局長（楚南兼二）

養殖場近辺の環境の変化はデータをとらず、はっきりとした原因は分かりませんが、アーサの生育に厳しい環境になっていると考えられます。

○議長（花崎為継）

天久朝誠議員。

○1番（天久朝誠議員）

私も現地調査させてもらって、一緒に。やはり感じたのが、杭が打たれていて、そこに網が張られると思うんですけど、ここは通常、約1メートルから80センチぐらい、腰ぐらいの高さまであるはずの杭が、足首までしかないという、場所が広範囲に渡ってあったと思うんですけど、これは潮の流れがそうさせたのかも、砂が滞積しているような状況ではあったと思うんですけど、ここでは網は張るんですか、それと何か掘ったり、それとももう張れない状況なのか、伺います。

○議長（花崎為継）

産振課長兼農委会事務局長 楚南兼二。

○産振課長兼農委会事務局長（楚南兼二）